三位一体主日　　ご自身をいろんな方法で表し、語られる神様　　２０２２．６．１２．

今日は、三位一体主日です。昨年の１１月２８日降臨節第１主日から始まった教会の暦は、５月２６日の昇天日までで、この世に来られたイエス様の生涯の出来事を中心にした学びを終えて、先週の日曜日は、聖霊降臨日でした。

それで、今日は三位一体である神様のことについて、改めて考えてみたいと思います。今日の説教の最後に、正三角形で囲まれた家の絵を載せました。これはイギリスの子どもたちのために、第２次世界大戦中に出された本を、私が２８年前に翻訳して出した本の挿絵です。三位一体について説明した所です。

新しい家を前にして、三人の人が話している話が紹介されていました。この三人はみんな、この家は私の家だと主張しているのです。

最初の人が言いました。「これは私の家だ。なぜなら、私がこの家を作ったのだから。」
すると二人目の人が言いました。「これは私の家だ。私がこれを、お金を払って買ったのだから。」
そうすると、三人目の人が言いました。「いや私の家でもある。なぜなら私がそこに住んでいるから。」

どうでしょうか。この三人が何を表すかおわかりでしょうか。そして、この家は何を意味しているのか想像できましたか？

この家は、世界全体だと考えてもいいのですが、私たち一人ひとりの人間だと考える方がいいでしょう。家である私を作ってくれたのは、大工である神様だ、ということが先ず頭に浮かぶでしょう。天地を創造された神様は私たち一人ひとりも造ってくださったのです。

しかし、神様に作られた家である私たちは、勝手に神様から離れて、悪魔の持ち物になってしまっていました。それを神様のものになるように、買い戻してくださったのが、イエス様だ、ということになります。大工であったイエス様も、このたとえでは、家を作るのではなく、買い戻す、つまり贖い主ということになるでしょう。そして、わたしたちはもはや悪魔の奴隷ではない、ということです。

そして、神様のものになった私という家には、聖霊が共に住んで、私を孤独にはさせない、ということが言えるのではないか、と思います。

さて、これらの神様の登場を、順番にドラマのように説明する人もいます。２０年ほど前に九州教区の通信教育で紹介したことですが、神様はご自身のことを教えるために、３幕のドラマを演じられた、という説明がありました。

第１幕は、旧約聖書です。それを通して神様はご自身が唯一の神であることを語られました。
あの通信教育では、第１幕の目的は、申命記第６章の『聞け、イスラエルよ』という言葉にまとめられると、教えました。

『4:聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。5:あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』

それから、福音書という第２幕が開いて、神様のことを、イエス様がもっと具体的にご自身の言葉と行動で表してくださいました。そのことを、ヘブライ人への手紙の著者はその冒頭で語っています。

『1:神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、2:この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。』

ですから、２幕で終ったかのような印象を与えますが、イエス様ご自身が、イエス様に代わってこの世に来られる聖霊の到来を話されました。ヨハネによる福音書の１４章の中です。

『26:しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。』

この聖霊による歩みが、第３幕で、使徒言行録から多くの手紙まで続いている、というわけです。そして、教会の歴史も『聖霊降臨後』を歩んでいます。現代も聖霊降臨後の時代が続いている、というわけですが、神様が三位一体であるということと、私たちとはどのように関係しているのでしょうか？

聖書の中には、三位一体ということはどこにも書かれていません。しかし、「父と子と聖霊」という表現が一か所だけ出てきます。覚えておられますか？

マタイによる福音書の最後２８章の終わりの部分です。
『あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、28:20 あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。』（２８：１９～２０）

この言葉は当時の洗礼式文からの影響だろう、と言われていますが、この部分を正確に訳すと、「み名による洗礼」ではなくて「父と子と聖霊のみ名の中へと（入る）洗礼を授けなさい」となるようです。

つまり、洗礼によって私たちは三位一体の神の名の中に導き入れられるということです。ヘブライ語では、名は体を表すので、洗礼によって、私たちは三位一体の神様の交わりの中に入るのです。

そしてもう一か所紹介しましょう。三者が並列に並んでいる箇所があるのです。
パウロが書いた、コリントの信徒への手紙二の最後、１３章１３節です。
『13:13 主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。』

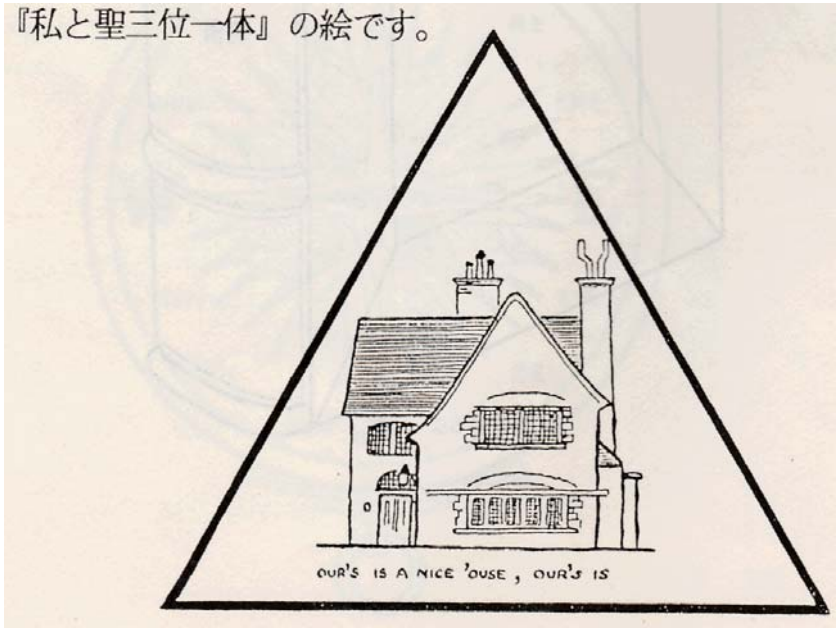
これも聞いたことがあるでしょう。パウロは手紙の最後に祝福の祈りをしているのですが、この最後の部分「あなた方一同と共にあるように。」を「私たちと共にありますように。」と言い換えて、私たちは朝夕の礼拝や集まりの最後の祝祷に使っています。

結局、大切なことは、豊かな愛と恵み、そして交わりの中にある神様の三位一体の中に、私たちがとっぷりと浸ること。これが大切なのであって、一人の神様に三つの顔があるとか、造り主、贖い主、慰め主という三つを覚えることが重要ではないのです。私は今年の復活節第２主日の説教では、イエス様の復活とは、息を吹き返して生き返ることではなく、イエス様が聖霊に変身して時間も空間も飛び越えて働く方になったことだと言いました。決して間違いではないと思います。

その深い私たちへの愛と恵みと交わりの神様が、昔も今も、そしてこれからも、私たちに働きかけ、守り導いてくださっている、ということを感じて、いつも喜んでいることが大切なんだろうと、私は思います。

今日は最初に「私は家」という話をしました。私たちも人間が作った家のように、大変弱い者です。しかし、聖書は、神様がこの下の絵のように、正三角形の枠となって、しっかりと私たちを守ってくださっている、ということを教えています。

私たちはそのことを、三位一体日の今日、改めて確信し、その愛と恵みと交わりを感謝して、楽しむ者でありたいと思います。



私たちの家は素敵な家